



Title	トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞 -dirの機能 : 話し手・聞き手の認識から説明
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 9, 31-39
Issue Date	2019-03-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73725
Type	bulletin (article)
File Information	03_ebata.pdf



[Instructions for use](#)

トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-*dir*の機能：
話し手・聞き手の認識からの説明 *

江 畑 冬 生
(新潟大学)

キーワード： チュルク諸語、トゥバ語、証拠性、語用論、認識更新

1. はじめに

トゥバ語には、もっぱら主節述語に付加される接尾辞 *-dir* がある¹。この接尾辞は、動詞述語文の述語にも名詞述語文の述語にも付加される。本稿では、名詞述語文に現れる接尾辞 *-dir* がどのような機能を持つのか明らかにすることを試みる。

接尾辞 *-dir* が動詞述語文に現れることは、頻度の上で高くない。この接尾辞が動詞述語文に現れる場合には、証拠性（推測・知覚・心理状態）に関わる機能を持つ（第2節で簡単に触れる）。

これに対し名詞述語文（形容詞述語文を含む）では、接尾辞 *-dir* が頻出する²。接尾辞 *-dir* は、（語用論的な差異を無視すれば）いかなる名詞述語文にも現れうる。Anderson and Harrison (1999: 89) では、この接尾辞は断定または証拠性 (assertive or evidential) の機能を持ち、非動詞述語文においては義務的であると記述される³。しかし筆者の調査によれば、接尾辞 *-dir* を決して用いてはならないような語用論的状况が確実に存在する。本稿ではこの接尾辞の機能を、語用論および談話の観点から解明する。結論として、接尾辞 *-dir* は名詞述語文において義務的ではないこと、接尾辞 *-dir* は証拠性ではなく話し手・聞き手の認識から説明すべきであることを主張する。

* トゥバ語は、ロシア連邦のトゥバ共和国を中心に話されるチュルク系の言語である。話者約 28 万人の大半はトゥバ共和国に居住するが、ロシア他地域、モンゴル国、中国新疆ウイグル自治区等にもそれぞれ数千人程度の話者が分布する。トゥバ語は膠着的な形態法を有する接尾辞型の言語である。本稿は、日本言語学会第 156 回大会（2018 年 6 月東京大学）における口頭発表の内容に加筆修正したものである。2 名の匿名査読者からの極めて有益なコメントに深く感謝申し上げたい。本研究は、科学研究費（課題番号 17H04773 および 18H03578）による研究成果の一部である。本発表中の例文は、特に断りのない限り、発表者によるフィールドワークまたは発表者の作成したトゥバ語コーパス資料（トゥバ語新聞 *Шын* 紙の電子版における 2012 年 10 月から 2015 年 1 月の記事を元に作成）によるものである。

¹ トゥバ語の接尾辞は一般に、頭子音交替および母音調和による異形態を持つ。接尾辞 *-dir* には、8 つの異形態 (*-dir*, *-d̄ir*, *-d̄ür*, *-dur*, *-tir*, *-t̄ir*, *-t̄ür*, *-tur*) がある。本稿では異形態の代表形として「接尾辞 *-dir*」と呼ぶことにする。形態素 *-dir* が接辞であるのか接語であるのか、その判断は簡単ではない。筆者は 2 つの理由により、この形態素を接辞であると見なす。第 1 に、前述のような異形態の現れ方は他の接尾辞と同様である。第 2 に、接尾辞 *-dir* と同様にもっぱら主節述語にのみ付加する形態素が他に 3 つあり、それらもまた接辞として解釈されうる（なおこの 3 つのうちの 1 つである疑問詞疑問接辞に関しては、江畑 (2018) において記述を行った）。

² トゥバ語（を含むチュルク諸語）では、名詞と形容詞をその形態統語的振る舞いにより明確に峻別することが困難である。そこで本稿における「名詞述語文」には、形容詞を述語とする文も含むことにする。

³ 接尾辞 *-dir* の機能に関して、Isxakov and Pal'mbax (1961: 433) では単にロシア語の *есть*（英語の *be* 動詞に相当）に対応することが述べられるのみである。Harrison and Anderson (2006: 59) では、“an enclitic that indicates deixis, emphasis and also serves as a copula (verb)” と説明される。

2. 動詞述語文における接尾辞 *-dir* の証拠性機能

本節では、動詞述語文における接尾辞 *-dir* の用法について簡単に確認しておく。前節でも述べたように、動詞述語文における接尾辞 *-dir* の出現頻度は高くはない。ただし接尾辞 *-dir* は、様々な動詞形式に付加することが可能である (Isxakov and Pal'mbax (1961: 373, 383); Ooržak (2012), Ooržak (2014: 87-95, 113-122))⁴。接尾辞 *-dir* が動詞述語文に付加された場合には、証拠性に関わる機能 (推測または視覚以外による情報) を持つ。例文 (1) および (2) は、接尾辞 *-dir* の推測用法である。以下のすべての例文では、接尾辞 *-dir* を太字により示す。なお例文 (2) のように、トゥバ語の名詞述語は 1・2 人称主語の場合には主語標示コピュラを伴う。

- (1) *eki düš düže-en-dir =sen, ogl-um*
 good dream dream-PST-DIR =2SG son-POSS.1SG
 「お前は良い夢を見たようだね、息子よ」
- (2) *dagın emcile-p a-ar bol-gan-dir =siler*
 again see.doctor-CVB take-AOR be-PST-DIR =2HON
 「あなたはもう一度医者にかかった方が良いでしょうだ」

例文 (3) のように視覚以外の感覚により得られた情報や (Aikhenvald (2000: 65) の分類では *nonvisual sensory* に相当)、例文 (4) のように主語の心的状態を述べる際にも接尾辞 *-dir* が現れる。

- (3) *kuš-tar et-ken-i diğna-l-ı-dir*
 bird-PL say-PST-POSS.3 hear-PASS-CVB-DIR
 「鳥たちの鳴き声が聞こえる」 [高島 (2008: 79)]
- (4) *kandig nom al-iksa-y-dir =siler*
 which book take-DES-CVB-DIR =2HON
 「あなたはどんな本を買いたいですか？」 [高島 (2008: 79)]

3. 疑問詞疑問文における接尾辞 *-dir* の語用論的機能

動詞述語文の場合とは対照的に、名詞述語文では、接尾辞 *-dir* は極めて頻繁に現れる。第 1 節でも述べたように、Anderson and Harrison (1999: 89) はこの接尾辞を義務的なコピュラ要素 (“quasi- or emerging copular form ... obligatory in sentences that lack verbs”) であると見なしている。しかしこの考え方では、以下で示すような接尾辞 *-dir* の語用論的機能を

⁴ 筆者の調べた限りでは、接尾辞 *-dir* は以下の動詞形式に付加しうる： *-(i)p* 副動詞形、*-a* 副動詞形、否定副動詞形、アオリスト形 (肯定・否定)、*-gan* 過去形 (肯定・否定)、*-bišaan* 継続形。これらの形式には定形も非定形も含まれるが、接尾辞 *-dir* が付加した場合には主節述語として振る舞うことになる。

説明することが不可能である。本節ではまず疑問詞疑問文に注目し、接尾辞 *-dir* の機能の説明を試みる。

疑問詞疑問文では、接尾辞 *-dir* が現れる場合と現れない場合がある。本稿では、疑問詞疑問文における接尾辞 *-dir* の使用に関して次のルールを提案する。

接尾辞 *-dir* は、疑問文への答えが聞き手の知識から得られると想定されるときには現れない。接尾辞 *-dir* は、疑問文への答えが聞き手の知識からは得られないと想定されるときに用いられる。

例文 (5a) では、話し手は「聞き手が答えを知っている」と想定している⁵。一方 (5b) は、話し手と聞き手がその答えを共に考えなければならない状況で用いられる。

(5a) *bo* *čü-l*
 this what-WHQ
 「これは何？」（話し手は聞き手から答えが得られると想定）

(5b) *bo* *čü-dir*
 this what-DIR
 「これって何だろう？」（話し手は聞き手も何か知らないだろうと想定）

時刻を尋ねる際、接尾辞 *-dir* はほとんど常に現れる。これも先のルールにより説明可能である。現在時刻を知識として知っている人はふつういないからである。(6a) に答える際、ふつうは（腕時計を見るなどの行為により）時刻を確認する必要がある。つまり疑問文の答えが聞き手の知識から得られるとは想定されないことになる。なお (6a) に対する応答文 (6b) も接尾辞 *-dir* を含むことになるが、この理由については第 4 節で改めて述べることにする。

(6a) *am* *kaš* *šak-tür*
 now how.much hour-DIR
 「今何時ですか？」

(6b) *am* *üš* *šak-tür*
 now three hour-DIR
 「今 3 時です」

⁵ 例文 (5a) の述語に現れている疑問詞疑問接辞 *-(i)l* (5つの異形態 *-il, -il, -ul, ül, -l* を持つ) は、「疑問文の答えが聞き手から得られるはずだ」という語用論的含意を表す(この点について詳しくは江畑 (2018) を参照されたい)。本稿の考察対象である接尾辞 *-dir* は疑問詞疑問接辞 *-(i)l* と共起することは不可能であり、両接辞は相補的に現れることになる。

寒い」ことを話し手が新たに認識したという点である。本稿ではこれを認識更新と呼ぶ⁶。例文 (10) および (11) における接尾辞 -*dir* は、話し手の認識更新マーカーとして働く。なお話し手が経験的知識として「東京は寒い」ことを知っている場合には、接尾辞 -*dir* を欠く文を用いることが可能である。

第 3 節では、疑問詞疑問文における接尾辞 -*dir* の出現に関して検討した。その中で例文 (6a) に対する応答文 (6b) にも接尾辞 -*dir* が現れることを示した。この例でも、現在時を確認するために認識更新が起こったためだと説明可能である。

- (6b) *am* *üš* *šak-tür*
 now three hour-DIR
 「今 3 時です」 (「今何時ですか?」に対する応答文)

次の例文 (12) が文字通りに「私はいる」を意味する文として成立しにくいのは、自分自身が存在することは予め知っているはずだからである。しかし特別な語用論的状况を作れば、認識更新が発生し (12) も成立することになる。例えば名簿の中から自分の名前を発見した場合には、(12) も問題なく成立する。

- (12) (*men*) *bar-dir* = *men*
 (1SG) existent-DIR = 1SG
 「(? 私はいる) / 私の名前がリストにある」

一方で (13) や (14) のような普遍的真理やことわざは、単に話し手の既存の知識から述べられることから、認識更新が起こらない典型例である。そのためこれらの場合には、接尾辞 -*dir* を含まない文が現れる。

- (13) *on* *kazi-ir* *beš* *bol-ur-u* *beš*
 ten minus-AOR five be-AOR-POSS.3 five
 「10 引く 5 は 5」

- (14) *köš-ken-de* *teve* *xerek* *čok*, *keš-ken-de* *xeme* *xerek* *čok*
 move-PST-LOC camel need not cross-PST-LOC boat need not
 「移動した時にはラクダは不要、渡河した時には船は不要」

5. 疑問文における認識更新

第 3 節では、疑問詞疑問文における接尾辞 -*dir* の用法を検討した。疑問文の場合も、応答のための認識更新がある場合には接尾辞 -*dir* が現れるのだと説明可能である。言い換えれば接尾辞 -*dir* は、認識更新が存在することを想定した疑問文に現れる。

⁶ 本稿の「認識更新」は田窪 (2010: 146) の談話管理理論による「知識状態の更新」と同じ意味で用いる。

ただし疑問文における認識更新は、疑問文を発する直後だけでなく直前にも行われる。本節ではこの点を、肯否疑問文の例による示すことにする。

例文 (15) は、何かを食べた直後の人に向けられたものである。この疑問文は、聞き手に認識更新が起こったであろうことを前提として発せられる。つまり認識更新は、疑問文を発する直前に行われたことになる⁷。

- (15) *amdannig-dir =be*
 delicious-DIR =Q
 (何かを食べた人に)「おいしいでしょう？」

一方で例文 (16) は、疑問文を発した後に認識更新が起こる例である。

- (16) *minda častirig bar-dir =be xina-p kör*
 here error existent-DIR =Q check-CVB see(IMP.2SG)
 「ここに間違いがある？ 確かめてみて」

疑問詞疑問文の場合と同様に肯否疑問文においても、話し手の知識から応答可能な（つまり認識更新が不要な）場合には接尾辞 *-dir* が現れない。

- (17) *ayma-añar-da baški-lar bar =be*
 tribe-POSS.2HON-LOC teacher-PL existent =Q
 「あなたの一族のうちに教師はいますか？」

6. 聞き手の認識更新マーカールとしての接尾辞 *-dir*

接尾辞 *-dir* には、話し手の認識更新だけではなく聞き手の認識更新と関わる場合も存在する。(18) や (19) のように、聞き手に説明を行う場合にも接尾辞 *-dir* が現れる。これらの場合、話し手の側には認識更新が起こっていない。

- (18) *bo me-eḡ bažiḡ-da telefon-um-dur*
 this 1SG-GEN house-LOC telephone-POSS.1SG-DIR
 (名刺を差し出しながら)「これは私の自宅電話番号です」 [高島 (2008: 17)]

- (19) *bažiḡ-iḡis bo-dur*
 house-POSS.1PL this-DIR
 「私たちの家はこれです」 [高島 (2008: 9)]

ただし接尾辞 *-dir* は、(20a) のように単に命題を伝える場合には現れない。(20b) のよ

⁷ (15)のように肯否疑問文における接尾辞 *-dir* が疑問文を発する直前の認識更新と関わっている場合、日本語のダロウにおける「確認要求」の用法と似ている (森山 (1992))。

うにまず談話上で認識対象が把握されており、それに対する聞き手の認識更新が生じた場合に必要とされる。

- (20a) *me-eŋ* *ad-im* *čoygaana*
 1SG-GEN name-POSS.1SG Choygana
 「私の名前はチョイガーナです」

- (20b) *čoygaana-dir*
 Choygana-DIR
 (電話で) 「チョイガーナです」

このように接尾辞 *-dir* は対話における話し手・聞き手の認識に関わって用いられる形式であるので、非対話的な場面では出現しないことになる。引用形式を比べると、(21) のように単に内容を述べる際には接尾辞 *-dir* は現れないが、(22) のような発言内容の直接引用ならば現れうる。

- (21) *ayana* *čüü* *dep* *xariıla-ar-il*
 Ayana what QUOT answer-AOR.3-WHQ
 「アヤーナは何と答えるだろう？」

- (22) *ogl-uŋ* *kandig-dir* *dep* *aytir-ar*
 son-POSS.2SG how-DIR QUOT ask-AOR.3
 「『息子さんはいかがですか?』と尋ねる」

物語中の名詞述語文にも、接尾辞 *-dir* は現れない。次の (23) のうち下線部が名詞述語である。この一連の談話テキスト中では、接尾辞 *-dir* はメタ的情報を示す冒頭の一文にしか現れていない。やはり接尾辞 *-dir* は、基本的に非対話的談話には現れないことが分かる。

- (23) [1] *šaanda bolgan čüve-dir*. [2] *čayniŋ končug izig üezi*. [3] *a't kulaa közülbəs karangi*. [4] *arga ištinde čaylagda čangis ög*. [5] *ögde dunun božuur četken čaliü kis bile šuvaganči kirgan avadan öske, kim daa čok*. [6] *arganiŋ düneki amidiralin kamgalakči burgan xaygaarap organ*.

「[1] 昔あったことだ。 [2] 夏のとても暑い時。 [3] 馬の耳が見えない暗さ。 [4] 森の中の夏営地にたった一軒のテント住居。 [5] テントには初産を迎えつつある若い娘と老婆のほか、誰もいない。 [6] 森の夜の生活を守護者たる神が見守っていた。」

7. 結論と課題

トゥバ語の接尾辞 *-dir* は、動詞述語文と名詞述語文で異なる機能を持つ。動詞述語文では証拠性の機能を持つ。名詞述語文では談話における語用論的な説明が必要で、話し手または対話の聞き手により認識更新が行われる場合に用いられる。

本稿で扱ったトゥバ語の接尾辞 *-dir* と同様の機能を果たす言語形式は、他のチュルク諸語には見られないようである。管見の限りでは、トゥバ語の方言（ジュンガル・トゥバ語）やトゥバ語に極めて近いとされる言語（トファ語・ソオート語）には、本稿で扱った接尾辞 *-dir* に相当する機能は見られない（Rind-Pawłowski (2014), Rassadin (1978), Rassadin (2010)）。ただしこれらの方言や言語の研究においては、名詞述語文にあまり注目されていないことにも留意が必要である。

聞き手の持つ情報に配慮が必要な言語としては、日本語を対象とする研究が進んでいる。例えば日本語文法記述研究会 (2003: 197) では、日本語の「のだ」の基本的性質のうち、「聞き手への提示」「話し手の把握」の両方を示している。同一の形式が、聞き手の認識と話し手の認識の両方に関与するという点で、トゥバ語の接尾辞 *-dir* のケースと類似する点が興味深いと言える。日本語を含めた他言語との対照については、今後の課題としたい。

略号

AOR: aorist, COND: conditional, CVB: converb, DAT: dative, DES: desiderative, DIR: the suffix *-dir*, GEN: genitive, HON: honorific, IMP: imperative, LOC: locative, PASS: passive, PL: plural, POSS: possessive, PST: past, Q: question, QUOT: quotation, SG: singular, WHQ: wh-question

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Anderson, Gregory D. and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.
- Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo Vostočnoj Literatury.
- Ooržak, Bajlak. (2012) *Die parzeptive Verbform -AdIr im Tuwinischen*. Marcel Erdal, Irina Nevskaya and Astrid Menz (eds.) *Areal, historical and typological aspects of South Siberian Turkic*. 91-96. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Ooržak, B.Č. (2014) *Vremennaja sistema tuvinskogo jazyka*. Moskva: Jazyki slavjanskoj kul'tury.
- Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščanii*. Moskva: Nauka.
- Rassadin, V.I. (2010) *Soyotica*. (*Studia Uralo-Altica*, 48). Szeged: University of Szeged.
- Rind-Pawłowski, Monika. (2014) Evidentiality in Dzungar Tuvan. Pirkko Suihkonen and Lindsay J. Whaley (eds.) *On diversity and complexity of languages spoken in Europe and Northern and Central Asia*. Amsterdam: John Benjamins. 339-377.
- 江畑 冬生 (2018) 「トゥバ語の疑問詞疑問接辞の否定文での用法： egophoricity からの説明」『日本言語学会第 157 回大会 予稿集』 342-347.

- 高島 尚生 (2008) 『トゥヴァ語基礎例文 1,500』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 田窪 行則 (2010) 『日本語の構造 推論と知識管理』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 モダリティ』 くろしお出版.
- 森山 卓郎 (1989) 「認識のモードとその周辺」 仁田 義雄・益岡 隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 くろしお出版. 57-120.
- 森山 卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」 『言語研究』 101: 64-83.

The So-called Evidential Suffix *-dir* in Tyvan:
Explanation from the Perspective of the Speaker's and the Hearer's Knowledge

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

This paper examines the function of the so-called evidential suffix *-dir* in sentences with a nominal predicate. Contrary to the view of Anderson and Harrison (1999), the suffix *-dir* is not an obligatory marker in nominal predicate clauses. I propose the following rule for the use of the suffix *-dir* in *wh*-questions: The suffix *-dir* is not used when the speaker expects the hearer to answer based on their pre-existing knowledge. The suffix *-dir* is used when the speaker does not expect the hearer to answer based on their pre-existing knowledge. The Tyvan suffix *-dir* is differently used in verbal predicate and nominal predicate sentences. With a verbal predicate, the suffix *-dir* functions as an evidential marker indicating inferential, nonvisual sensory, or psychological state. With a nominal predicate, the function of the suffix *-dir* should be considered as a knowledge update marker in a discourse. No other Turkic languages seem to have a functionally equivalent marker, but the Japanese explanation modality marker *noda* is comparable since it is also sensitive to the knowledge of the speaker and the hearer in an actual discourse.

(えばた・ふゆき ebata@human.niigata-u.ac.jp)